『真実摂経』一切如来法サマヤ大儀軌王（遍調伏品）について

吉　澤　朱　里

『真実摂経』は 7 世紀中頃から 8 世紀に南インドで成立したと考えられている経典であり、インド中期密教を代表する経典の一つとされている。我が国では『初会の金剛頂経』という名でよく知られている。この『初会の金剛頂経』という名は、不空（8 世紀）が著した『金剛頂経瑜伽十八会指帰』（大正 No.869 以下、『十八会指帰』と略す）に基づき、弘法大師空海（774-835）によって『金剛頂経開題』（弘全 4）や『教王経開題』（弘全 4）などにおいて使われているため、よく知られている。

さて、『真実摂経』のサンスクリットの原題は

“sarvatathāgatatattvasaṃgraha”（以下、『真実摂経』を STTS と略す）であり、これを和訳すると「一切如来の真実を集めたもの」となる。

「真実」とは一般的には「ものごとの真の在り様」を示す言葉であり、「ものごとの真の在り様」の追求は、あらゆる学問に共通する根本的なテーマの一つである。それはまさしく、人間の知にとっての普遍的なテーマである。

この経典の題名にある「一切如来の真実」とは一体何であるのか。

1．「一切如来の真実」について

「一切如来の真実（sarvatathāgatatattva）」という言葉は、STTS の一切如来大乗現証大儀軌王（金剛界品）の冒頭に初めて登場する。その場面とは、一切義成就菩薩を一切如来が驚覚させる場面である。

kathaṃ kulaputrānuttarāṃ samya[ksaṃ] [1] bodhim abhisaṃbhotsyase / yas tvaṃ sarvatathāgatatattvānabhijñatayā sarvaduḥkarāṇy utsahasīti // atha sarvārthasiddhir bodhisattvo mahāsattvas sarvatathāgataiś coditaḥ samānas tata āsphānakasamādhito vyutthāya sarvatathāgatāṃ praṇipatyāhūyaivam āha / bhagavantas tathāgatā ājñāpayata kathaṃ pratipadyāmi kīdṛśaṃ tattvam iti // evam ukte sarvatathāgatās taṃ bodhisattvam ekakaṇṭhenaivam āhuḥ // pratipadyasva kulaputra svacittapratyavekṣaṇasamādhānena prakṛtisiddhena rucijaptena mantreṇeti //

（KL Acc. No.143 KLD No.108 folio.67a9-67b4）

〔一切如来は一切義成就菩薩に仰った。〕

「どうして無上正等覚を現等覚するだろうか。汝は一切如来の真実を知らないまま、あらゆる難行に耐え忍んでいる。」と。

そして、一切義成就菩薩大士は一切如来によって驚覚され、息を吹き返して、そのアースパーナカサマーディ（āsphānakasamādhi）から立ち上がり、一切如来に敬意を表し、次のようにお願い申し上げた。

「世尊である如来たちよ。私はどのように修行すべきでしょうか、真実とは何でしょうか、教えてください。」と。

このように尋ねられた一切如来は、その菩薩に口を揃えて次のように仰った。

「善男子よ。自心を洞察するサマーディに住し、本来成就している真言を意のままに唱えることによって修行しなさい。」と。

この後、一切如来は「一切如来の真実（sarvatathāgatatattva）」を自ら証得する実践方法として五段階の現等覚（五相成身）を伝授する。そして、一切義成就菩薩は金剛界如来として成道する。このように一切如来が説いた五段階の現等覚によって一切義成就菩薩は「一切如来の真実」を悟る。この「一切如来の真実」について、STTS は真言やマンダラなどの多様な象徴を用い

て説いている。

STTS の達意釈である『タントラ義入（Tantrārthāvatāra）』（Toh.2501, Ota.3324 以下、TAA と略す）を著した Buddhaguhya（8 世紀）は、次のように註釈している。

ཨི་གཉིས་ཡེ་ཤེས་ཁྱོད་ཡུལ་བ།། ཆོས་གྱི་རྒྱས་པ་མ་ལུས་རྫོལ།། དུས་ཀུན་དུ་ནི་དེ་བཞིན་བས།།
དེ་ཉིད་ཅེས་ནི་བཙོམ་ལྡན་གསུངས།།[2] དེ་ཕྱིར་ཡེ་ཤེས་གང་འཇུག་པ།། དེ་ལའང་དེ་ཉིད་ཅེས་བྱ་བརྗོད།།
གང་ཕྱིར་དེ་ཉིད་ཁྱོད་ཡུལ་བར།། ནམ་ཡང་རྫུ་[3]བར་མི་འགྱུར་ཕྱིར།། དེ་ཉིད་བརྗོད་པའི་རྒྱུད་ལས་ནི།།
ཀུན་ཏུ་བའི་ནི་པ་ལ་གནས་ནས།། དེ་ཉིད་མཚན་ཉིད་གཞན་བརྗོད་པ།། དེ་དག་མཉན་པ་ཉིད་དུ་ཕྱིས།།

（D 1b4-2a1, P 2a5-2b2）

不二なる智の境界は、言語の戯論から残らず解脱しており、全時において同様であるから、「真実」であると世尊は仰ったのである。そのため、智に入るどのような者も、そのような者に対しては「真実」と称される。何故ならば、真実の境界は如何なる時も虚偽に変わることはないからである。『真実摂』というタントラにおいては、世俗諦に立脚して他の真実の定義が説示されている。それらを聴聞すべし。

Buddhaguhya の解釈に基づくと、「真実（དེ་ཉིད།）」は勝義諦としては「不二なる智（མི་གཉིས་ཡེ་ཤེས།）」を意味している。不二なる智は一切の戯論を離れているので、不二なる智そのものを言葉によって表現することは不可能である。したがって、『真実摂経』の「真実」とは不二なる智を世俗諦として説示したものである、と Buddhaguhya は説明している。

Buddhaguhya が註釈した「真実」、すなわち「不二なる智」について、Padmavajra（9 世紀）は『タントラ義入註（Tantrārthāvatāravyākhyāna）』（Toh.2502, Ota.3325 以下、TAAV と略す）において次のように再註釈している。

དེ་ཡང་སྨྲ་ཚིག་མ་ཕྱི་མ་ལ་ཆོས་ཀྱི་རྒྱུ་ལྷན་ཀྱིས་གྲུབ་པ་ཡི་ཤེས་ཕྱའི་ངོ་བོ་ལ་ནི་དོན་དམ་པའི་བདེ་བོ་ནི་
ཁྱོད་ཅེས་བྱའོ།། ཡེ་ཤེས་དེ་ཁྱོད་ཀྱི་རྣམ[4]ཀྱི་ཕྱག་རྒྱར་སྣང་བ་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཕྱི་དང་ནི་མེ་མེ[5]ལས་
བྱུང་མི་གས་ས་ས་འཕྲོས་པའི་སེམས་དཔའ[6]ཆེན་པོ་དང་ཕྱི་ནང་གི་ལྷ་མོ་ལ་སོགས་པ་ཕྱག་རྒྱ་དང་བཅས་
པའི་ལྷའི་ཚོགས་ནམས་ལ་ནི་བྱང་རྩོ་བ་ཁྱོད་ཅེས་བྱའོ།། དེའི་ཕྱི་ཐུག་དང་ཚིག་དང་ཡི་གེའི་
ཚོགས་མང་པོ་རྣམ་པའི་རྒྱུད་ཆེན་པོར་བསྡུས་པའི་ཕྱིར་ན་དེ་ཁྱོད་བསྡུས་པ་ཞེས་བྱའོ།།

（D 105b4-6, P 114a7-b1）

また、その直後に任運に成就している五智の自性を勝義の真実という。その智の自性を象徴する印として現れた五如来と、それぞれの働きに適った各々の部の〔菩薩〕大士と、内外の女尊を初めとする印を具えた諸尊の集会を世俗の真実という。それらの区分と言葉と文字を集めたものを偉大な根本タントラにまとめたから『真実摂』と言われる。

དེ་ཁོ་ན་ཁྱོ་ད་ཟས་པར་དག་པའི་ཚོས་ཁྱོ་ལ་དམི་གས་པའི[7]ཡེ་ཤེས་ཏེ་ཡུལ་དེ་ལས་གཞན་དུ་མི་འགྱུར་
ཞིང་ནམ་དུ[8]ཡང་ཟློ་བར་མི་ཐེད་པའི་ཕྱིར་ན་དེ་ལ་ཡང་དེ་ཁྱོ་ད་ཅེས་བརྗོད་དེ།

（D 107a5, P 116a3）

真実は清浄な法性を観る智であり、その境界は他に変わることはなく、如何なる時も偽りなきものである。それが故に「真実」と言う。

Padmavajra の註釈を要約すると、「勝義の真実（དོན་དམ་པའི་བདེ་བ་ཁྱོད།）」は、「清浄な法性を観る智」であり「五智の自性」を意味している。「世俗の真実」は、その智を象徴するもの（印）として現れ出たものを意味している。

また、STTS の逐語釈の『一切如来真実摂大乗現証タントラの真実作明という註釈（sarvatathāgatatattvasaṃgrahamahāyānābhisamaya-nāma-tantratattvālokakārī nāma vyākhyā）』（Toh.2510, Ota.3333　以下、TĀK と略す）を著した Ānandagarbha（9 ～ 10 世紀）は、「一切如来の真実」について十種類の真実を挙げている。

དཀྱིལ་འཁོར་དང་། སྔགས་དང་། ཕྱག་རྒྱ་དང་། བདག་དང་གནས་ལ་སོགས་པ་བསྲུང་བ་དང་།
ཉེ་རྒྱ་མས་བྱེན་བྱང་བའི་ཚོ་ག་དང་། བཟླས་བརྗོད་དང་། ཟློག་པ་ལ་དང་།
ཕྱི་དང་ནང་གི་བདག་ཉིད་ཅན་ཕྱི་ནས་ཕྱི་ཀ་དང་། ཉེ་བར་བསྡུ་བ་དང་། མཆོད་ནས་གཤེགས་ཤུ་གསོལ་བའོ།།

（D ལི 27a1-2, P ཨི 31b6-7）

①マンダラ　②真言　③印　④自身と場所などの守護　⑤諸尊を招く儀軌　⑥念誦　⑦修習　⑧外と内の尊格の護摩　⑨収斂　⑩供養の後、撥遣すること

これらの十種は、マンダラを造り、真言を唱え、印を結ぶなどして、本尊を招き、そして送る次第であるので、「一切如来の真実」とは「一切如来のマンダラ儀軌」と言い換えることができる。Ānandagarbha が説いた十種類の真実は、Buddhaguhya と Padmavajra が解釈した「世俗の真実」の意味と一致している。

STTS とは、言葉では表現できない「不二なる智」すなわち「清浄な法性を観る智」を説示するために、さまざまな象徴（世俗の真実）として現出し、展開し、収斂するプロセスを集めた経典である。つまり、金剛界如来が悟った「一切如来の真実」とは、4 つの大儀軌王に説かれたマンダラの展開そのものなのである。

２．一切如来法サマヤ大儀軌王（遍調伏品）

次に、STTS 全体の構成から、一切如来法サマヤ大儀軌王（遍調伏品）の位置付けと、その意味について考察する。

STTS の根本タントラは合計 22 章から構成されており、内容によって 4 つの「大儀軌王」という章のまとまりに分けられている。第 1 章から第 5 章は一切如来大乗現証大儀軌（sarvatathāgatamahāyānābhisamaya-mahākalparāja）、第 6 章から第 14 章は一切如来金剛サマヤ大儀軌王（sarvatathāgatavajrasamayamahākalparāja）、第 15 章から第 18 章は一切如来法サ

マヤ大儀軌王（sarvatathāgatadharmasamayamahākalparāja）、第 19 章から第 22 章は一切如来事業サマヤ大儀軌王（sarvatathāgatakarmasamayamahākalparāja）である。

STTS において、五現等覚によって「真実」を悟った金剛界如来について、次のように形容されている。

atha bhagavān vajradhātus tathāgatas tasminn eva kṣaṇe
① sarvatathāgatasamatājñānābhisaṃbuddhaḥ
② sarvatathāgatavajrasamatājñānamudrāguhyasamayapraviṣṭaḥ
③ sarvatathāgatadharmasamatājñānādhigamasvabhāvaśuddhaḥ
④ sarvatathāgatasarvasamatāprakṛtiprabhāsvarajñānākarabhūtas tathāgato 'rhaṃ samyaksaṃbuddhaḥ saṃvṛtta iti //
（KL Acc. No.143 KLD No.108 folio.68a9-68b2）

そして、世尊である金剛界如来は、まさにその刹那に、
①一切如来との平等性智により現等覚した者、
②一切如来の金剛との平等性智により印の秘密サマヤに証入した者、
③一切如来の法との平等性智により自性清浄を得た者、
④一切如来の一切との平等性により本性光明の智の源になった者〔そのような〕如来、アルハット、正等覚者となったのである。

金剛界如来はこのような四種類の一切如来の平等性智によって「一切如来の真実」を悟ったのである。この四種類の智の内容は、4 つの「大儀軌王」に説かれた「真実」の象徴であるマンダラ儀軌にそれぞれ対応している。

また、これら 4 つの「大儀軌王」は、不空（8 世紀）が著した『十八会指帰』（大正 No.869）においては「四大品」[10] と称されている。それぞれ金剛界品・降三世品・遍調伏品・一切義成就品と言われており、これらの名称が日本密教においてはよく知られている。これらの題名はサンスクリット原典からの漢訳ではなく、説かれている内容によって付けられた題名である。

サンスクリットの原題に共通性が見受けられるように、これら 4 つの「大

儀軌王」はそれぞれ独立して成立したのではなく、4 つの章が 1 つの内容として STTS 全体を構成している。

以上のことがらについて、STTS における「大儀軌王」のサンスクリット原題と、金剛界如来が得た 4 種類の如来の智と、『十八会指帰』に説かれた品名をそれぞれ対応させると、次のような表になる。

STTS 根本タントラの章	STTS サンスクリット原題の章名	金剛界如来の如来の智	不空『十八会指帰』の品名
第 1 章〜第 5 章	一切如来大乗現証大儀軌王 （sarvatathāgatamahāyānābhisamaya-mahākalparāja）	①一切如来の平等性智 （sarvatathāgatasamatājñāna）	金剛界品
第 6 章〜第 14 章	一切如来金剛サマヤ大儀軌王 （sarvatathāgatavajrasamaya-mahākalparāja）	②一切如来の金剛との平等性智 （sarvatathāgatavajrasamatājñāna）	降三世品
第 15 章〜第 18 章	一切如来法サマヤ大儀軌王 （sarvatathāgatadharmasamaya-mahākalparāja）	③一切如来の法との平等性智 （sarvatathāgatadharmasamatājñāna）	遍調伏品
第 19 章〜第 22 章	一切如来事業サマヤ大儀軌王 （sarvatathāgatakarmasamaya-mahākalparāja）	④一切如来の一切との平等性 （sarvatathāgatasarvasamatā）	一切義成就品

各章の関係性について、Buddhaguhya は次のように TAA において註釈している。

དེ་ནས་ཡང་དེ་དག་དང་པོ་ཉིད་དུ་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཉིད་ལས་བྱུང་བའི་ཕྱིར་རྒྱལ་བའི་རིགས་ཞེས་བྱགས་
སོ།། ཡང་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཏོ་རྗེ་སེམས་དཔའ་ཐུགས་དེ་བཞིན་ཉིད་ཀྱི་ཏིང་ངེ་འཛིན་གཟུམ་ལས་ཆུམ་པར་
རྒྱལ་བ་ཏོ་རྗེ་འཛིན་པ་དང་། འཛིན་ཏེ་ནས་བཅོ་ལྔ་ཏུ། ནས་མཚན་ཞེ[11]ཕྱིར་ཡོ་ཆུམས་རང་གི་ས་བཏེགས་པའི་
ཐུགས་ཕྱིར་ཡོ་ཀན་ས་བལྟས་ནས། དེ་ཡི་རྒྱས་ཕ་ཐུ་མཐུན་པར་ཐུགས་ཏུ་མར་ཐུར་ཏེ། དེ་དག་ཉི་ཏ་ཕྱི་ཐུག
ན་ཀན་ས་ཡི་ཐུག་རྒྱུའི་མཚན་མ་ཏོ་རྗེ་དང་པར་ལ་སོ་ཀས་པ་ལས་ཐུང་ནས་ཆུམ་པ་མངོ་ར་ཀན་ས་བཏེགས
སོ།། དེ་ཆུམས་ཀྱང་བཅོ་མ་ལྔན་འདས་ཏེ་ངེ་ཡི་ཏ་ལ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་དབང་ཐུག་དེ་ཉིད་རང་གི་ས་ཐུས་པའི
ཐུགས་ཀྱི་ཚེ་ཐ་ཐག་ཏུ་པ་མངོ་འདུལ་བ་དང་། ཆུམ་པར་དག་པའི་ཚོས་ལ་ཀཱ་ཤ་ཀས་པ་དང་། ཐུ་ཡོ
ཡོངས་པའི་བསམ་པ་ཐམས་ཅད་ཡོངས་ཐུ་ཚོགས་པར་མཛད་པ་ལ་ས་ཀོ་ཀས་པ་བདེ་བར་ཀན་ཀས་པ་མཐའ་དག་ཀི
ཡོན་ཏན་ཀྱི[12]ཁྱད་པར་མཐའ་ཡས་པའི་རང་བཞིན་ཆུམ་ཁྱད་པར་མེད་པར་ཡང་དག་པར་བཟློད་དོ།།
ངོ་རྒྱ་དང་། བདུན་དང་། ཤིན་ཏོ་ཚེའི་ཤི་ཀས་ལ་ས་ཀོ་ཀས་པ་ཡང་ངོ་རྒྱ་ལ་ས་ཀོ་ཀས་པ་ལས་ཐུང་བའི་ཕྱིར་དེ་དག
ཆུམ་པར་བཀོད་དོ།།

(D 2b6-3a3, P 3a7-3b5)

そしてまた、それらはまず第一に、如来の性質から生じたので「仏部」と称される。次に、九類生主である世尊金剛薩埵は、降三世持金剛（降三世品）と世自在（遍調伏品）と虚空蔵（一切義成就品）を〔各〕自の使命の心真言に住して示した。その後、それ（降三世や世自在や虚空蔵）に随順する身の集会が多くなった。〔それらの集会は〕それら（降三世や世自在や虚空蔵）の手の印相である金剛や蓮華などから生じ、数多くのものに住み分けられた。それらはまた、世尊である一切のサマーディの自在者が自ら創り出した身の集会の区分であり、多くの悪を調伏すること（金剛部）と、清浄な法をご覧になること（蓮華部）と、貧しい者の一切の思いを満たすこと（宝部）は、無辺の善逝の功徳の、無辺の諸々の自性であり、一様に正しく生起されたものである。金剛部と蓮華部と宝部は金剛など（金剛、蓮華、宝）から生じたものであるが故に、それらは整然と区分されたものである。

Buddhaguhya の解釈を整理すると、一切如来法サマヤ大儀軌王（遍調伏品）は、如来の性質のうち清浄な法をご覧になることに該当しており、その智の象徴として蓮華部が現出する。Padmavajra が先述した「真実」の勝義の意味は「清浄な法性を観る智」であるので、「清浄な法をご覧になること」を主題とする一切如来法サマヤ大儀軌王（遍調伏品）はまさに STTS の「真実」の内容を具体的に説き示したものであることがわかる。

3．一切如来法サマヤ大儀軌王（遍調伏品）の構成

一切如来法サマヤ大儀軌王（遍調伏品）において説かれている主題は、如来の本質のひとつである「一切法は自性清浄であると知る智」である。ここでは、観自在菩薩がこのような智をマンダラ儀軌として説いている。その儀軌は不空が著した『十八会指帰』においては「遍調伏品」と名付けられている。「遍調伏」とは「遍く調伏する」という意味である。観自在菩薩はどのように世間を遍く調伏したのだろうか。この問題を明らかにするために、『真

実摂経』の註釈者たちの解釈を見て行くことにする。

一切如来法サマヤ大儀軌王（遍調伏品）における中心的な尊格は観自在菩薩である。前の章では降三世の姿をしていた持金剛が観自在菩薩の姿をして登場する。この観自在菩薩が一切如来の祈請を聞いて六種類のマンダラ儀軌を説く。『真実摂経』における観自在菩薩がどのような役割と意味を持った尊格なのか、ということについて、註釈者たちの解釈を取り上げる。

まず最初に、Śākyamitra（8世紀）は『コーサラ荘厳真実摂註（Kosalālaṅkāratattvasaṃgrahaṭīkā）』（Toh.2503, Ota.3326　以下、KAT と略す）において次のように註釈している。

ཀུན་དུ་སྒྲུབ་པས་གཟིགས་ཏི་དབང་ཕྱུག་དང་ཞེས་ཁ་བ་ལ་ཀུན་དུ་སྒྲུབ་པས་གཟིགས་པ་ཅི་ཞིག་པར་མཛད་པ་སྟེ། ས་མམས་ཅན་རྣམས་སྨིན་པ་དང་ཡོངས་པ་དང་། འདོད་ཆགས་ཏི་དེ་ལོ་ནི་ཉིད་ལ་གཟིགས་པ་དང་། ཆགས་ཤུ་ཟིན་ཀྱང་ཕྱུགས་རྟེ་ཆེན་པོ་ཉིད་ཏི[13]ཉེས་པས་མ་གོས་པ་དང་། འཇིགས་པ་ཆེན་པོ་བཅུད་ཏིས་ཉེན་པའི་ཕྱུག་བསྔལ་དང་ལྡན་པའི་ས་མམས་ཅན་ཏི་ཁམས་ལ་གཟིགས་པ་སྟེ་འདི་དག་གཟིགས་པའོ།

（D ཡི·6b7-7a2, P ཡི·7b3-5）

‘Avalokiteśvara’ と言われるものについて、‘Avalokita’ とは観察しているということである。諸有情を成熟させ解脱させることと、貪欲の真実を観ることと、〔諸有情を救済することに〕執著し過ぎても大悲そのものは過失に染まらないことと、八大畏怖による災難の苦がある有情界を観わたすこと、これらが〔観自在の〕「観」である。

次に、Ānandagarbha は TĀK において次のように註釈している。

གཟིགས་པས་ན་ཀུན་དུ་སྒྲུབ་པས་གཟིགས་ཏེ། ཚོས་ཐམས་ཅད་རང་བཞིན་ཏིས་ཐུན་པར་དག་པའོ་ཞེས་སོ་སོར་ཏོ་གཟིགས་པར[14]མཛད་པ་དང་། ས་མམས་ཅན་ནམས་བསྒྲལ་བའི་ཕྱིར་གཟིགས་པར་མཛད་པའོ།། དེའི་དབང་པོ་ནི་བཙན་པོ་ནོ།།

（D ཡི·30a2-3, P ཡི·35a1-2）

観るので ‘Avalokita’ であり、一切法は自性清浄であると個別に観ること（妙観察）と、諸有情を救うために観ることをなさっている。その ‘īśvara’ とは上首である。

観自在菩薩は「一切法は自性清浄である」と観ることができる、すなわち、あらゆる存在の本質は清浄であることを観て知っている尊格である。観自在菩薩は清浄な法を観る智である如来の智を具えていることがわかる。如来の智を具えつつも菩薩の立場にいる理由は、有情救済という清浄なる貪欲を具えているからであると思われる。有情の煩悩に覆われた心の奥底にある自性清浄心、すなわち菩提心を観察している。有情が成熟して菩提心を発すために、観自在菩薩は世間において多様な姿を現すことによって教化する。

次に、一切如来法サマヤ大儀軌王という題名にある「一切如来法サマヤ」とは何を意味するのか、ということについて、註釈者たちの解釈を読解しながら考察する。

「一切如来法サマヤ」という言葉は、この章の冒頭の箇所、観自在菩薩に対する百八名讃の後に初めて登場する。一切如来の祈請を聞いた観自在菩薩は、ヴァイローチャナに対して感嘆の言葉を唱える。ヴァイローチャナは観自在菩薩の感嘆の言葉を聞き、次のような所作をする。

atha bhagavān vairocanas tathāgataḥ sarvatathāgatavajradharmasamayasaṃbhavādhiṣṭhānapadmaṃ[15] nāma samādhiṃ samāpadyedaṃ sarvatathāgatadharmasamayaṃ nāma sarvatathāgatahṛdayaṃ svahṛdayān niścacāra // hrīḥ // athāsmin viniḥsṛtamātre sarvtathāgatahṛdayebhyaḥ padmākārā anekavarṇarūpaliṅgeryāpathā raśmayo viniḥsṛtya sarvalokadhātuṣu rāgādīni vi[śu][16] ddhadharmatājñānāni saṃśodhya punar apy āgatyāryāvalokiteśvarasya hṛdaye praviṣṭā iti /

（KL Acc. No.143 KLD No.108 folio.150b6-151a1）

そして、世尊ヴァイローチャナ如来は「一切如来金剛法サマヤから生じた加持蓮華」というサマーディに入り、この「一切如来法サマヤ」という一切如来の心真言が自身の心臓から出現した。「フリーッヒ。」

そして、この〔一切如来の心真言が〕出現するやいなや、一切如来の心臓から蓮華のような多様な色と形と特徴と動きを具えた諸々の光明が放たれて、〔この光明が〕全世界における貪欲などを清浄な法性の智と

して浄化して、再び戻り聖観自在の心臓に入った。

それに応じて、ヴァイローチャナは「一切如来金剛法サマヤから生じた加持蓮華（sarvatathāgatavajradharmasamayasaṃbhavādhiṣṭhānapadma）」という名称のサマーディに入り、「一切如来法サマヤ」という心真言「フリーッヒ」を唱える。この心真言の名称は、この品全体の題名である一切如来法サマヤ大儀軌王にもなっている。題名と同じであるように、この心真言はこのマンダラ儀軌において核心的な意味を持っている。「一切如来法サマヤ」という言葉について、Ānandagarbha は TĀK において次のように註釈している。

དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་ཆོས་ཀྱི་བདག་ཉིད་བཟློག་ཕྱིར་ཞེས་གསུངས་ཏེ།། དམ་ཚིག་ཅེས་རྒྱུ་བ་ནི་ཐུགས་རྗེ་ཆེ་ཡི་ཁམས་ཏེ།། (D ཤི·18b3-4, P ཞི·22a5)

「一切如来の法」は蓮華の光明の姿をしている。「サマヤ」は因である。

ヴァイローチャナが「フリーッヒ」と心真言を唱えた後に、一切如来の心臓から蓮華の光明が放たれる。その光明が全世界に遍満することによって、三毒の一つである貪欲は大悲の貪欲に浄化される。このように煩悩を浄化する智である光明の発生因が、「フリーッヒ」という心真言であり、これが「一切如来の法サマヤ」の意味になっている。この全世界に遍満した光明は、観自在菩薩の心臓の中へ収斂される。

次に、ヴァイローチャナから放たれた蓮華の光明が全世界を浄化する場面に関して、「蓮華の光明」に焦点を当てて「蓮華」が何を象徴しているのか、ということについて考察する。

観自在菩薩は蓮華部の尊格であるので「蓮華」が重要であることは勿論であるが、ここではマンダラ儀軌において使用される「蓮華」について、その「蓮華」が象徴しているものについて注目したいと思う。

観自在菩薩が全世界調伏大マンダラ（sarvajagadvinaya-nāma-mahāmaṇḍala）を現した後に、蓮華師による蓮華弟子のマンダラ儀軌が説かれる。第 15 章のマンダラ儀軌の特徴は、師が弟子に蓮華を授けるという点である。

tato yathāvat karma kṛtvā padmavigrahaṃ pāṇau dātavyaṃ // oṃ padmahasta vajradharmatāṃ pālaya // tena vaktavyaṃ / kīdṛśī sā vajradharmateti / tato va[ktavyam /][17] yathā raktam idaṃ padmaṃ gotradoṣair na lipyate / bhāvayan sarvaśuddhin tu tathā pāpair na lipyate // iyam atra dharmatā //

（KL Acc. No.143 KLD No.108 folio.153b3-4）

その後、〔蓮華師は〕適切に所作をして、蓮華の像を〔蓮華弟子の〕手に授ける。

「オーン　蓮華を手に執る者よ、金剛法性を守りなさい。」

彼（蓮華弟子）は〔次のように蓮華師に〕尋ねるべきである。

「その金剛法性とは何ですか。」と。そこで、〔蓮華師は次のように〕応えるべきである。

「この赤蓮華は生まれの過失（泥＝貪欲）によって汚されない。そのように、一切が清浄であると修習する者は諸々の罪によって汚されない。これがこの場合の法性である。」

この蓮華は、赤蓮華が泥水の中を通って成長するけれどもその泥水によって汚されないように、一切法は自性清浄であると修習している行者はあらゆる罪によって汚されないことを象徴している。

「赤蓮華」の原語は ‘raktaṃ padmaṃ’ であり、この ‘raktaṃ’ という言葉は「赤」という意味の他に「染められている」という意味にも取れる。それでは何によって蓮華は染められているのか、というならば、衆生を救済したいという欲で蓮華は染められているのである。この欲について Śākyamitra は KAT において次のように註釈している。

ཐུགས་རྩེ་ཆེ་མངས་བསྒྲུབ་པའི་ཕ
གས་པ་ཆེ་མངས་ཅན་ཚུལ་པ་དང་གོང་པོ་།།

（D ཨ·34a6, P ཁ·45a5）

発菩提心の真言は、有情を成熟させ、解脱させることを欲する欲〔ということ〕に尽きるのである。

この欲は三毒の一つである貪欲ではなく、衆生を救済する菩薩大士の清浄な貪欲のことである。菩薩大士の境地から見れば煩悩を含む一切法は自性清浄であるので、清浄と煩悩という相反する意味も両立することが可能である。

一切如来の心臓から放たれた蓮華の光明は貪欲を浄化する智であるように、マンダラ儀軌における蓮華は清浄なる菩薩の貪欲を象徴している。

4．まとめ

STTS の「真実」とは、Buddhaguhya と Padmavajra によると、清浄な法を観るという如来の不二なる智を意味している。この智は一切の戯論を離れているから、勝義諦としては言葉では言い表すことができないが、世俗諦としては象徴的にマンダラという形で表すことができる。この清浄な法性を観る不二なる智、すなわち「真実」の象徴であるマンダラの儀軌を集めた経典が STTS であるということになる。

一切如来法サマヤ大儀軌王（遍調伏品）においては観自在菩薩が六種類のマンダラ儀軌を説く。観自在菩薩は一切法が自性清浄であると観る智を具えており、一切有情に菩提心を発こさせるために多様な姿を現すことによって教化する。「一切如来法サマヤ」とは蓮華の光明の発生因である心真言（種字）のことである。蓮華の光明とは、一切法は自性清浄であることを観る智そのものである。その蓮華の光明が遍満して全世界を浄化する、すなわちマンダラ儀軌によって有情の貪欲が菩薩の貪欲に浄化されて、全世界の有情が浄らかな菩提心を発す。そのことが「全世界を遍く調伏すること（sarvajagadvinaya）」の意味になる。

以上、STTS の「一切如来の真実」の意味と一切如来法サマヤ大儀軌王（遍

調伏品）について考察した。

STTS については今までに 3 種類の校訂本[18] が出版されているが、いずれも約 40 年前に出版されたものである。そのため、3 種類の校訂本には不鮮明な資料による細かい問題点がある。筆者は一切如来法サマヤ大儀軌王（遍調伏品）について、サンスクリット原典の写本とチベット語訳と漢訳を比較検討して、諸々の註釈書の解釈を踏まえながら和訳を作成し、文意を取ってサンスクリット原典を再校訂することを進めている。

不空の漢訳[19] は金剛界品までしかない。そのせいか、先行研究は『真実摂経』の金剛界品に集中している。遍調伏品についてはほとんど研究されてこなかった[20]。しかし、今まで見てきたように、STTS は四大儀軌王（四大品）が揃ってワンセットである。「一切如来の真実」の全体像を知るためには、遍調伏品など金剛界品以外の品も研究する必要があると思われる。

【略号】

KL Acc.No.143 KLD No.108：Kaiser Library 所蔵 Acc. No.143（Corresponds to Nepal-German Manuscript Preservation Project Reel No.C14/20）KLD No.108

D：ཌེ་དན་ 版チベット大蔵経

P：北京版チベット大蔵経

弘全 4 ：弘法大師著作研究会 1995『定本弘法大師全集 第四巻』高野山大学密教文化研究所

【凡例】

STTS の梵文写本においては、tatva や satva 等のように子音の重複が無い形で表記されている。本稿においては、正書法による標準化した形（tattva や sattva 等）を用いた。

【註】

1）梵文写本において、［　］内の文字の上部の 3 分の 1 が破損している。

2）P གསུང།།

3）P བསྒ་

4）D ཏ་ཀ་ས་

5）P ཏ-ཏ-ལ-

6）P ས་ལ-ས-ཅན-

7）D ཡ-ཌ-

8）P ཏ་ なし

9）P བསྒ-ས-

10）不空『金剛頂経瑜伽十八会指帰』（大正 No.869）

金剛頂經。瑜伽有十萬偈十八會。初會名付一切如來眞實攝教王。有四大品。一名金剛界。二名降三世。三名遍調伏。四名一切義成就。

（vol.18 p.284c16-18）

11）P ནམ-ཁའི-

12）D ཀ-, P ཀ-ས-

13）P ཀ-ས-

14）P ཏ-ཏ-ཡ-

15）梵文写本においては、写本の筆者が一度 ‘padmaṃ vajrannāma’ と 記してから ‘vajra’ に二重線を引いて訂正したため、‘padmaṃ nnāma’ となっている。この箇所に対応するチベット語訳（Śraddhākaravarman, ངེ-ཚེན-བཟང-པོ། “དེ-བཞིན-གཤེགས-པ-ཐམས-ཅད-ཀྱི-དེ-བོ-ན-ཁ-ཏོ-བསྡུས-པ-ཞེས-བྱ-བ-ཐེག-པ-ཆེན-པོའི-མདོ།།”） は D 版（Toh.479 82a1）と P 版（Ota.112 92a2）ともに པདྨ-ཞེས-བྱ-བའི- である。漢訳（施護『一切如来眞實攝大乗現證三昧大教王經 』大正 No.882 p.399b27）は「蓮華」である。したがって、ここでは ‘padmaṃ nāma’ と 校訂した。

16）梵文写本においては [ ] 内の 1 文字分が不鮮明で解読が困難である。この箇所に対応するチベット語訳は D 版（Toh.479 82a3）と P 版（Ota.112 92a4）、KAT（Toh.2503 ཏ-29b3, Ota.3326 ཁ-38b8）と TĀK（Toh.2510 ཀ-18b7 , Ota.3333 ཌ-22b2）の引用箇所において རྣམ-པར-དག-པ-（清浄）である。漢訳（施護 大正 No.882 p.399c4）においては「清淨」と訳されている。したがって、梵文写本の不鮮明な箇所を補い ‘vi [śu] ddha’ とした。

17）梵文写本においては [ ] 内の 2 文字分が破損している。この破損した箇所について、チベット語訳（Toh.479 D 84a6, Ota.112 P 94b8）にお

いては འདི་ལར་ཟླ་བཞོན་པར་བྱའོ།། （この言葉を言うべきである。）と訳されている。漢訳（施護 大正 No.882 p.401c19-20）においては「以頌答言（頌を以て答えて言はく）」と訳されており、「以頌（頌を以て）」という語が補われている。したがって、梵文写本の [ ] 内の 2 文字分の破損箇所を補い ‘va[ktavyam]’ と校訂した。

18）Isshi Yamada 1981 “Sarvatathāgatatattvasaṅgraha nāma mahāyānasūtra Śatapiṭaka series Indo-asian literatures” vol.262 New Delhi

Lokesh Chandra 1987 “Sarvatathāgatatattvasaṅgraha sanskrit text with introduction and illustrations of maṇḍalas” Motilal Banarsidass Delhi

堀内寛仁 1974『梵藏漢対照 初会金剛頂経の研究 梵本校訂篇（下）』密教文化研究所

――――― 1983『梵藏漢対照 初会金剛頂経の研究 梵本校訂篇（上）』密教文化研究所

19）不空『金剛頂一切如来眞實攝大乗現證大教王經』大正 No.865

20）『真実摂経』の遍調伏品に関する先行研究には、漢訳からの和訳がある。

遠藤祐純 2005『続金剛頂経入門 3 初会金剛頂経 遍調伏品・一切義成就品』ノンブル社

遍調伏マンダラの研究には、

乾仁志 1996「『初会金剛頂経』の四大品とマンダラの特色」『高野山大学創立百十周年記念論文集』高野山大学

1997「初会金剛頂経所説のマンダラについて（後）」『高野山大学密教文化研究所紀要』第 10 号 密教文化研究所

田中公明 1988「ペンコルチューデ仏塔と『初会金剛頂経』所説の 28 種曼荼羅」『密教図像』第 6 号 法蔵館

2007『曼荼羅グラフィクス』山川出版社

森雅秀 1997「ペンコルチューデ仏塔第 5 層の『金剛頂経』所説のマンダラ」『チベット仏教図像研究 ―ペンコルチューデ仏塔―』国立民族博物館

などがある。